

神社や寺院へ行き、絵馬に願い事を書いたことがある方は多いのではないのでしょうか。祈願だけでなく、願い事が叶ったときにもお礼として奉納する絵馬。大抵は木の板でできていて、馬などの絵が描かれています。縁起物でもある絵馬について意味や由来を調べました。

節句人形
素朴なギモン



ところ狭しと吊るしかけられている絵馬。
祈願と満願成就の御礼として奉納する

神馬に乗った神から誕生した絵馬

絵馬は願い事や、その成就の御礼として神仏に奉納するもの。起源は古代の馬信仰にある。神々は神馬しんめという馬に乗った姿で現れるとされ、神の移動には馬はなくてはならない存在と考えられていた。当初は神事において、生きた馬を献上していたが、土で作った馬形、木で作った板立馬、そして絵に描いた馬のように徐々に簡略化したものを奉納するようになった。中世になると図柄も豊富になり、馬をはじめ十二支や信仰対象の神仏像も登場したが絵馬という名前はそのまま残っている。

最も古い絵馬は1989（平成元）年に平城京跡から出土した彩色絵馬とされている。738（天平

10）年以前に描かれ、天然痘たの祟り退散や雨乞いのための神への捧げ物であったと考えられている。室町時代末期から江戸時代になると、狩野元信や山楽、円山応挙ら著名な画家が描いた神馬図などが登場し、全国の社寺に奉納されている。



神馬図額 元信筆（しんめずがく もとのぶひつ）
所蔵：賀茂神社（兵庫県たつの市）
※上記画像の無断転載を禁止します

大絵馬、小絵馬

手のひらサイズの絵馬が一般的だが、サイズはさまざまだった。平安時代末期は合同で小型の絵馬を納めることが主流だったが、中世末になると大型の絵馬へんがくが登場し、扁額（建物の内外や門・鳥居などの高い位置に掲出される額）形式で拝殿や絵馬堂に掲げられた。これらは「大絵馬」と呼ばれる。

一方、小型の絵馬は江戸時代になると民間信仰に結びつき、個人が納めるのが主流となった。これらは「小絵馬」と呼ばれ、サイズは主に30cm

前後で吊るしかける形式。このスタイルの絵馬は庶民の間で受け継がれ、祭礼など年中行事の際の奉納や個人の祈願、満願奉納というように、明治から大正にかけて絵馬は存在感を増していった。形状は、関東は黒枠で縁の出た屋根型で板が薄いものが多い、関西は屋根型は少なく横長で四角型のものが多い。地域によって絵柄もさまざま。

正月になると「巨大絵馬」「ジャンボ絵馬」と呼ばれる大型の絵馬を毎年発表して飾る神社もあり、恒例行事として集客にも一役買っている。